****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 143 号
−環境・農業・食べ物など情報の交流誌−
2004.09.30（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
＜キーワード＞
環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所＆『電子耕』編集同人が編集・発行。
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm
**********発行部数　1500　部**********

□　目　次　　□----------

＜今週の提言＞農業経営規模の拡大と農村の環境保全　中川昭一郎
＜読者の声＞柴田さんから
＜旬を食べる―野良からの便り・10＞“柿（医者いらず）”　小泉浩郎
＜山崎農業研究所情報＞
◇現地研究会（第 113 回定例研究会）速報（2004.9.25-26）
　――現地に学ぶ「森林とのつき合い方」
◇第 114 回定例研究会予告（2004.11.6）
＜79 歳の意見＞「一日だけに生きる」に徹した水上勉先生　原田　勉
＜農文協図書館情報＞（9/30 更新予定）　農文協図書館・原田太郎
＜編集後記・同人の近況報告＞９月 16 日〜９月 29 日

＜今週の提言＞農業経営規模の拡大と農村の環境保全

最近の日本農業新聞（９月 25 日）に、農村の現場では、農地の利用集積による経営規模の拡大と農地や用排水路などの農業資源の保全・管理をどうするかという将来的課題が浮上しているとの報告があった。

先に公表された食料・農業・農村基本計画の見直しにおける「中間論点整理」では、４つの重要課題の中で「農地制度の改革」と「農業環境・資源保全政策の確立」につき、その基本的方向付けを行なっているが、その前者で取り上げた農地の利用集積や法人化による経営規模の拡大と、後者で取り上げた用排水路等の保全・管理との間に矛盾が生ずる恐れがあり、この問題解決の方策と支援策の必要性を指摘しているわけである。

すでに各地では水田を主体とする農地の経営規模が数十ヘクタールを超える経営体も生まれつつあるが、法人化や株式会社の導入などによる大規模化など、

利潤追求型のこの傾向をさらに助長しようとすれば、その近隣に住む農業者の数は必然的に減少し、従来は集落機能の一環であった用排水路・農道・溜池等の維持管理は、何らかの新しい仕組みを作らない限り困難となる。
　そしてその対策としては、極端に言えば次の２つの方向が考えられるであろう。用排水路を維持管理の楽なコンクリート水路やパイプラインにしコンピューター制御するなど、圃場を人出のかからない作物生産工場化する方向と、経済的効率をある程度犠牲にしても、農業者以外の地域住民との協働によって、自然環境を含む地域資源の保全管理を図り、大規模経営と農村の環境保全が両立する道を探る方向である。

　今回の中間論点整理によれば、目指すべき姿として「我が国農業全体を環境保全を重視したものに転換」すると述べており、農地集積や法人化による経営規模拡大などの生産・経営安定対策と農業・農村の環境保全との相互矛盾にももっと目を向け、具体的な方策の検討をさらに深めることが必要と思われる。

中川　昭一郎
東京農業大学客員教授、山崎農業研究所顧問
y.noken@taiyo-c.co.jp

＜読者の声＞

=-

●09/21 柴田さんから

さてさる７月２９日　電子耕１３９号　に枝豆の茹で方を知らせる ｎｈｋの放送が詳しく載っておりました。

「電子耕１３９号＜旬を食べる―野良からの便り・６＞
http://macky.nifty.com/cgi-bin/bndisp.cgi?M-ID=1283&FN=20040729040018
“枝豆（畑のエメラルド）”小泉浩郎さんの記事」

　コピーをとり友達等に配った所、皆さんから喜ばれました。吾が家でも作りました。確かに一味違いが判りました。

　最近うちのおばちゃんもパソコンを初めました。長く続けばよいのですがま

だわかりません。手紙を書いているより打つのが楽しいらしい様です。

これから気候の変化が甚だしくなります。
皆様　お体をお大切に。では何れまた。
９月２１日１８時

柴田（太田市・81 才）

＜旬を食べる―野良からの便り・10＞“柿（医者いらず）”

「柿が赤くなると医者が青くなる」という。ビタミン類が豊富で二日酔いにも効く。「天高く馬肥える秋」だから、柿の効用には、気候も大いに手伝っているだろう。

柿は、日本が原産だ。学名も「Diospyros kaki」で、辞書を引いたら英語、ドイツ語、フランス語でも kaki である。

柿といえば、富有、次郎がポピュラーだが、田舎の屋敷周りには、在来名でアオソ、ヒャクメ、ミョウタン、ナガラがあった。アオソ細長い小さな柿だが、初秋最初に、実が青いまま甘くなった。ヒャクメは、丸い大きな形で、黒くなるほどゴマのある甘柿だ。どういうわけか、金持ちの庭先にあった。

十五夜を過ぎる頃から、子供達の遊びに柿泥棒が加わる。これが難しい。ガキ大将から手解きを受ける。柿の実は枝にしっかりとついている。柿を掴んでそのまま引っ張ると大きな音を立てて枝ごと折れる。柿を掴んだら手の中にぽとりと落ちるまで、右か左にゆっくりゆっくり回すのだと教える。柿泥棒のこの時間の長いこと、とても辛抱できず物音を立てるから、「こらっ」と怒鳴られることになる。

ナガラは渋柿だから、もっぱら干し柿である。竹竿の先を割り、柿の実がついている枝を挟んでくるりと回して折る。竿先の柿が落ちないように神妙に地上に降ろす。樹上の柿は、全部は採らない。野鳥用に５～６個は残す。皮をむき、棕櫚の葉を細く裂いて２つの柿を振り分け荷のように結ぶ。それを横竿に吊るして乾かす。だから吊るし柿ともいう。軒先に暖簾のように干した光景は、秋の代表的な風物詩だった。

硬い柿や干し柿も美味しいが、熟柿もまた格別。これは、庭先でなければ味わえない。ナガラは甘く舌触りは滑らか、ミョウタンは、上品な甘味とネットリ感、学校帰りに柿の木に上り、真っ赤に熟した柿を頬張りながら、夕日に顔染め、暮ゆく秋を眺めたものだ。

蛇足だが、雨上がりの柿の木に登ることは厳禁、近所の何人かの子供は、落ちて骨折している。

小泉　浩郎
山崎農業研究所事務局長
y.noken@taiyo-c.co.jp

＜山崎農業研究所情報＞

◇現地研究会（第 113 回定例研究会）速報（2004.9.25-26）
　――現地に学ぶ「森林とのつき合い方」

場所：群馬県鬼石町　桜山公園「桜山きづきの森」１７名参加
第１日　現地見学「桜山きずきの森」見学および講演
第２日　鬼石町の森林を鋸谷さんの説明で歩く

講演要旨（第１日目）
（１）鬼石町森林の現状　産業観光課長　新井　正春氏
　鬼石町は農林業振興と観光にも力を入れている。過疎化が進んでいる。人口は 1945 年（昭 20）の 13,307 人を最高に、以後減少し、現在は 7,143 人である。65 歳以上の高齢者が 28.5%である。３河川（三波川、神流川、荒沢川）あって渓谷などの自然に恵まれている。リクリエーション施設として桜山では 7,000 本の冬桜と 3,000 本の春桜がある。冬桜は春にも咲くので春は見事である。
　平地が少なく農地面積も小さい。204 戸の農家があり、販売農家は 68 戸、あとは自給農家である。一戸当たり平均耕地面積は 0.37ha、0.5ha 以下の農家が７割を越える。山間地域の畑にはリンゴ、ミカン、ウメ、こんにゃく、タラノ芽などが生産されている。地産地消を目標にしている。付加価値の高い有機農法も盛んである。農産物直販施設を整備しつつある。農業生産所得は 53 万円（平 12）である。観光農園が平成３年に開園した。
　町面積の 80%が林野であり人工林が 81%民有林が 95%を占める。大部分が杉

である。そのほとんどが伐期を迎えている。木材利用のほかに地球温暖化防止、公共的機能を生かした林地利用を進めている。子供対象の森の学校を企画した。シイタケ栽培などで森林を楽しんでもらう。

林業振興計画の中に木材の利用と過疎化防止対策として、若者定住対策促進事業がある。新築住宅の建築木材を一棟分無償で交付し、住宅取得借入金の利子補給する。新築住宅には固定資産税相当額を奨励金として交付するなど、さまざまな林業振興政策がある。いままで 52 件の建築があった。その 30%が地区外、のこりが地区内の人であった。なお私有林の寄付を町に申し出る人もいるが、現状では維持管理が大変なので断っている。

林業、林産また観光と森林の多目的利用を通して鬼石町を発展させたい。

（文責：安富）

◇第 114 回定例研究会予告

――統一テーマ：農村資源の保全管理

日時：１１月６日（土）　１３時３０分ー１７時００分

講師　笛木　昭氏　（鯉渕学園　教授）

「農地はなぜ遊休化するか、有効利用に何が必要か」

講師　中村　好男氏　（東京農業大学　教授）

「住民による農業用水の環境再生と保全・管理」

＜79 歳の意見＞「一日だけ生きる」に徹した水上勉先生

水上勉先生が９月８日長野県東御市北御牧の仕事場で肺炎のため亡くなった。５年前、創刊間もない『電子耕』No.4（1999.7.22）の＜舌耕のネタ＞で「水上
勉（８０歳）の電脳くらしを考える」というコラムを書いた。

*『電子耕』No.4（1999.7.22）
http://nazuna.com/tom/1999/04-19990722.html

水上先生は、７０歳のときに心筋梗塞になり、三分の一の心臓で生きてこられた。手書きの原稿が書けなくなって電脳くらしを始めた。７９歳のとき眼底出血で左目が見えなくなった。そこで音声入力をはじめパソコンの画面で校正をするときは拡大鏡を使う生活になった。それでも河出書房新社の求めに応じ

て、『泥の花』を出版された。１９９９年１１月のことである。
　あれから５年、８５歳でついに天空に昇られた。

『電脳暮らし』の本の中で「一日だけ生きる」という章がある。８０歳のとき難病を抱えて生きてゆくことが重たくなって、不老長寿に反対の気持ちで「一日だけ生きればよい」という思想に到達した。

　これは、信濃飯山で農耕三昧していた正受老人の「一日暮し」の思想からからきたものだ。それをわかりやすく水上先生が書いている。
　「本来無一物」「一日いきればよい。たった一日でよい。あすも、あさっても生きたいと思うから、この世がめんどうになってくる。今日一日を何とか、人にめんどうをかけず、健康ですごせたらと、そればかりの工夫なら、一日のことだから、雨でも嵐でも、まあ辛抱できるというものだろう」

　水上先生自身が難病を得て「病気こそ悟りが得られる」と正受老人の教えに気がつかれたようだ。
　「一日だけ生きればよい」という思想は、多くの読者の賛成があって長文の手紙を貰った。この一部始終は『電脳暮し』の中に詳しい。ぜひお薦めしたい。

　水上先生のお別れ会は、９月２８日に行われたが、私は、先生を偲んでこの二つの著作を読み、自らの闘病の体験に照らし、改めて「一日暮し」の思想に賛成し、肝に命じている。
　そして、８５歳の最期まで「一日だけを生きる」に徹した水上勉先生の、生と死をうらやましいと想う。

◆参考図書『電脳暮し』１９９９年　哲学書房刊　１９００円＋税
http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=99013874
（この本は活字が大きく弱視や老眼者に親切な出版社である）
哲学書房
http://www.tetsugakushobo.com/default.html

『泥の花』１９９９年　河出書房新社刊　１６００円＋税
http://www.trc.co.jp/trc/book/book.idc?JLA=99049450

◆参考リンク
◎[インタビュー]水上勉　コンピュータ生活を語る

（聞き手・津野海太郎）
語り言葉と書き言葉との関わり
失敗することが学問のようなもの
高齢者や障害者が楽になる時代が来た
http://www.honco.net/9905/in-mizukami-j.html
（＃水上さんはかなりなパソコンの使い手だったんですね。）

出典：季刊　『本とコンピュータ』1999 年５月号
http://www.honco.net/9905-toc-j.html
から。
★注：現在最新の『本とコンピュータ』サイトは、
http://www.honco.jp/
に移転していて、しかも 2005 年６月に終刊を迎えます。
上記インタビューは、旧サイトにあるので、いつ消えるか分かりません。
ページを保存しておく方法は、インターネットエクスプローラをお使いの場合、
左上メニューの「ファイル」から「名前を付けて保存」でハードディスクの任
意の場所に保存してください。

◎特定非営利活動法人　一滴の里
（水上勉氏の設立による文化施設「若州一滴文庫」の存続団体）
http://www.itteki.jp/

◎かんげつびょう　ー水上勉さんの世界ー
（水上勉ファンの uni（うに）さんのホームページ）
＃横浜での追悼映画祭の紹介があります。

◎水上勉文学散歩
http://comet.tamacc.chuo-u.ac.jp/bungakusanpo/mizukami/mizukami
＃文学の舞台になった場所の写真がたくさんあります。
・中央大学文学部文学科国文学専攻　渡部芳紀研究室
http://comet.tamacc.chuo-u.ac.jp/
から。

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人
原田　勉
http://nazuna.com/tom/

＊参考リンク：原田太郎

＜農文協図書館情報＞（9/30 更新予定）

◆2004.8.1ー8.31 登録の新規収蔵図書
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html

◆話題の図書：
『写真ものがたり　昭和の暮らし　シリーズ 』全５巻
　民俗学写真家　須藤功 著
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai024.html

　　「第一巻　農村」
米増産に村中で力を合わせて勤しみ、貧しくも誇りに満ちて生きていた
昭和３０年代前後の農村の人々の暮らしを、全国の地方写真家が撮った
貴重な写真に、子どもたちにもわかりやすい物語を添えて綴る。

　　「第二巻　山村」
山のふところに抱かれ、森を育て、木を伐り、炭を焼き、丸木舟や木地物を
つくり、焼畑に汗を流し、獣を撃って暮らした日々。

　　以下、続巻　３：漁村と島　４：都市と町　５：川と湖沼

農山漁村文化協会　発行

◆寺尾五郎文庫
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/090teraobunko.html
・目録その５　-25 ページ-（完結）
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/list/090terao/tg43/01.html
＊個人文庫は館内閲覧・コピー・FAX サービスのみ利用可能です。

農文協図書館　　IT 担当　原田太郎
http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/

＜編集後記・同人の近況報告＞（９月２日ー９月 15 日）

＜山崎農業研究所情報＞でも紹介されている、群馬県鬼石町でひらかれた山崎農業研究所現地研究会に参加した。鋸谷さん・大内さんに会うのは、７月３日の山崎記念農業賞の表彰式以来である。「桜山きづきの森」は鋸谷式間伐を導入して３年ほどになるが、近隣の間伐不足の森とはまったく様相が異なる。木はのびのびと育ち、下層植生が豊かであることは、わたしのような素人の目にもはっきりとわかる。鋸谷さんは、林業は自然の摂理にさからうことはできない、わたしたちにできるのは自然の摂理を見極め、好ましい方向に進むように手助けすることだけです、と語る。見事に“再生”した人工林を前にしての鋸谷さんの話は説得力に満ちていた。（山崎農業研究所会員・田口　均）

◎お願い「＜読者の声＞の投稿規定・メールの書き方」

１、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
２、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
３、１回１テーマ、10 行位に。
４、ホームページを持っている人は、文末に URL を。
５、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。
http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html
インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、
y.noken@taiyo-c.co.jp
となっております。投稿される方はこちらのアドレスにお願いします。

次回　144 号の締め切りは 10 月８日、発行は 10 月 14 日の予定です。
　最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』
著者：原田　勉　定価：735 円　発行日：2002 年 10 月 4 日
発行所：岩波書店　ISBN4-00-700045-X
まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら
http://nazuna.com/tom/book.html

『電子耕』から大切なお知らせ
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html
＜本誌記事の無断転載を禁じます＞

****
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」　第 143 号
バックナンバー・購読申し込み／解除案内
http://nazuna.com/tom/denshico.html
http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html
2004.09.30（木）発行　　山崎農業研究所＆編集同人
mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp
**********ここまで『電子耕』**********